

義足のゴール

春日信彦

理子は日本一のサッカー部創設に燃えていたが、カンボジアの研修で地雷の事故に遭い右足を失う。オリンピックの夢を失

サッカー部の創設

理子はお嬢様学校である中洲女学院高校の「サクラサク」の電報を受け取った。家族は最後までこの高校に入学することを反対した。理由は寄付金が半端無いことと自由すぎる校風であった。理子は5歳のときからFC福岡でプレイしてきた。できればサッカー部のある公立高校でサッカーを楽しんでほしかった。しかし、理子はこの高校に自分の青春をかけたかった。

理子の夢はこの高校に日本一のサッカー部を創設することだった。両親は公立高校のサッカー部創設を勧めたが理子はこの高校への入学を押し通した。結局、公立高校に合格した理子であったが両親の反対を押し切って中洲女学院に入学金を振り込んだ。また、授業料はすべてバイトで支払うとたんかをきった。あきれた両親はしぶしぶ高額な寄付金まで支払った。

両親がこの高校を嫌っている最大の理由は校則がゆるすぎることであった。服装、化粧、染髪は自由、どんなバイトでもOK。さらに、出席日数が不足していても試験の点数が及第点であれば単位が与えられる。優秀な成績特待生は予備校に通い学校の授業に欠席しても出席扱いにする。こういううわさがこの学校には根付いていた。確かに、特進クラスからは一流大学や、医学部に合格していたが理子の両親はこのやり方が気に入らなかった。

体育祭では各競技の優勝者に報奨金が支払われ、文化祭では文化人、芸能人、有名選手を招き、これをテレビ局に放映させた。これらには多額のお金がかかるがすべて父母たちによる寄付金でまかなわれていた。このやり方は学校を全国的に有名にしたが、子供たちを金儲けの道具にするようなこんな学校には通わせたくなかった。

この高校は芸能人、プロテニス選手、プロゴルファー、オリンピック選手など多くの有名人を輩出してきたが、結果主義のやり方は退学者や自殺者までも出していた。この影の部分は表に出ないように学校側がお金でもみ消してきた。理子もこれらのやり方に賛成しているわけではなかったが、日本一のサッカー部の創設にはこの高校しかないと考えていた。

理由は二つあった。一つ目は優秀なアスリートがたくさん在籍していること。二つ目は多額の遠征費を出してくれる父母がいること。この二つを満たす高校は中洲女学院しかなかった。だが、あまりにも創部の夢を追い求めていたため、なぜこの高校にサッカー部が無いかを深く考えていなかった。この高校にはサッカー部、柔道部、剣道部、空手部が無い。

各学年は、50名の普通クラスA,B,C,Dの4クラス、50名の成績特進クラスRS、50名のスポーツ特進クラスSSからなっている。理子は一年Aクラスである。確かにお嬢様高校ではあるが全国から優秀な人材を集めている。しかも金持が多い。ここの学生は医者、弁護士、裁判官、検事、パチンコ店社長、一部上場会社の重役、衆議院議員、参議院議員、閣僚、知事、芸能人、プロスポーツ選手などの子供たちがたくさん在籍している。

理子は新学期が始まると創部のためのポスターを掲示板に貼ったが、誰一人ポスターに見入った学生はいなかった。昼休みの度にしばらく掲示板から離れて様子を伺っていたが、数人の学生が一瞥しただけでほとんどの学生は素通りであった。教室に戻った理子は一人うつむいて目を閉じた。授業中の先生の声は消え去り、この学校にサッカー部が無い理由についてじっくりと考える日々が続いた。ほとんどの部活があるのになぜサッカー部は無いのか？

家に帰るとベッドの中で一晩中考え続けたがどうしても理由がわからなかった。理子は5歳のときから兄、誠人と一緒にFC福岡でサッカーを楽しんできた。また、サッカーは誰でも楽しめるスポーツと思い込んでいた。だから、サッカー部の部員は簡単に集まるものと安易に考えていた。ところが、サッカーの話題をする学生は誰一人いなかった。歌手、アニメ、ドラマ、スケート、化粧、旅行、バイト、彼氏のことなどありふれたガールズトークは耳にするが、なでしこジャパン、ワールドカップ、Jリーグの話をする学生はいなかった。

散々悩んだあげく4歳上のFC福岡の先輩健太に相談することにした。彼は福岡体育大学2回生でサッカー部のゴールキーパーをしている。週に1回FC福岡のコーチにやってくる。FC福岡はJリーガーを輩出している名門クラブである。小学生の選手は彼が大好きである。いつも笑顔で指導するからだ。理子がクラブに入って最初に仲良くなった先輩でもあった。早速メールで悩みを送信した。

すぐに返信が来た。相談する相手を間違っている。男にわかるはずが無い。女友達に相談したほうがいいんじゃないか。このようなメール内容だった。理子もうかつだった。確かに的を射ていた。クラスで一番仲のいい直子に相談することにした。メールで相談しようかとも思ったが、やはりじっくり本音を聞きたい気持ちが強くなり、日曜日にスタバで相談することにした。

直子は文学少女だった。とてもおしゃべりで愉快ではあるが、しゃべりすぎが災いしている。最初の数学Aの授業でうるさいとおじい先生に怒鳴られた。中3の模擬試験で熊高の合格判定はAであったらしいが、なぜか私立のお嬢様高校に入学した。熊本の天草出身で、真珠の養殖をしている資産家の三女である。クラスはRSで入学式のとき理子に声をかけられた。お互い高校での最初の友達となった。

いつものスタバで待っていると直子がやってきた。二人ともモカのコーヒーが大好きだった。話し始めると2時間はしゃべっていた。早速、単刀直入に悩みを打ち明けると直子はしばらく黙っていたが、自分のサッカーへの気持ちを話し始めた。サッカーはやったことが無いしやりたいとも思わない。女のやるスポーツにしては過激すぎる。きっと足にあざができるし額が傷だらけになると思う。このようなことを直子は小さな声で答えた。

女の子は肌のことを一番気にするから、お嬢様はサッカーやらないと思う。直子は結論を言った。理子は大きく頷いた。理子は女でありながらこのことに気づかなかった自分が恥ずかしくなった。足にはあざがたくさんあり、額にも傷があった。ボールを奪い合うとき足と足がぶつかり合う。ヘディングするとき額に激しい衝撃がある。こんなことは当然でありこれがサッカーなのだがお嬢様には耐えられないことだとわかった。

理子は愕然となり創部の夢の炎は小さくなってしまった。しばらく、黙っていると直子がポツリとつぶやいた。「部員第一号がここにいるぞ」人差し指で自分を指差した。まったくサッカーのことがわかっていない直子に少しむかついたが、そこはぐっと怒りをこらえて優しく答えた。「気持ちだけでいいよ。骨折されたら困るから」直子は華奢で格闘技のようなサッカーをやる筋肉がまったく無かった。すると能天気的笑顔で「え～・・・じゃ～マネージャーはどう？」と追い討ちをかけてきた。

理子の本音は直子にサッカーにかかわってほしくなかったが、今の孤立無援の立場では猫の手でもかりたかった。「そいじゃ、マネージャー頼むよ」直子を頭数に入れた。二人は今後の活動について話し合ったが、理子の心は沈む一方であった。直子は打開策として理解しがたい提案をした。それはサッカー部を止めて同好会にしようと言い出した。つまり、部活の合間に適当に参加してもらおうと言うわけだ。練習時間も内容も曜日も服装も自由と言うことにして、一から理子が手取り足取り教えることを提案した。

これは頭痛の理子の頭をハンマーで殴るようなものだった。あまりのショックにスタバを飛び出してしまった。家に戻るとベッドに飛び込みじっと目を閉じた。しばらくすると涙が流れてきた。馬鹿でわがままな自分が情けなくて死にたくなかった。両親にいまさら学校を辞めたいとは言えるはずもなく、かといって元気よく学校に行く気持ちにもなれなかった。多額の寄付金を支払ってくれた両親にサッカー部のことをどのように話せばいいのか考えると、家出したくなってしまった。

涙は止まらなかった。たんかをきって入った高校であったが一ヶ月もしないうちに挫折してしまった。今すぐにでも電車で飛び込みたい衝動に駆られたが、健太に今から死にますとメールした。机の上に“ごめんなさい”と書いたメモを置くとサッカーボールをはさみで突き刺し駅に向かった。猪突猛進で短気な理子は小学生のころからよく家出をした。そのたびに兄の誠人と健太が探して連れ戻した。涙しながら歩いている理子の携帯から“会いたかった”の着メロがなった。

着信音には気づいていたが足を止めなかった。赤坂駅のホームで最初の電車を見たとき腰を抜かしベンチに腰を落とした。自分の愚かさに改めて気づくと、もはや立つ気力も失ってしまった。ただぼんやりと人の流れが目に入り電車の音が静かに耳に入ってきた。今すぐ心臓が止まれ、と神様にお願いした。ゆっくりと目を閉じて両手を合わせた。

突然、頭に雷が落ちた。「キャ〜」悲鳴を上げると往来していた周りの人たちが振り向いた。上を向くと頭の上には拳を握った健太がいた。一瞬笑顔を見せると左手に持っていたソフトクリームを理子の口に当てた。健太に手をひかれ家路に向かう理子は涙しながら直子の提案を話した。健太はしばらく黙って頷いていた。直子の提案に感心したからだ。理子は直子と違った打開策を期待していたが、健太は直子の提案に賛成した。

翌日、同好会のポスターを掲示板に貼ると、放課後理子と直子はサッカーグラウンドに立っていた。サッカーの遊びにやってくるお嬢さんたちを相手するためだ。理子はゴールキーパー、直子はゴール前にボールをセットする。直子が手持ち無沙汰にしていると、第一号が現れた。帰宅部のお嬢三人が冷やかにやってきた。直子がセットしたボールをジープの学生がケラケラ笑いながら転がすように蹴った。理子が拾うようにしてボールをキャッチすると直子にボールを転がして返した。

三人は二人を交互に見ては笑い立ち去っていった。理子も立ち去りたかったがきつとうまく行くと健太に励まされたことを思い出し、もうしばらく我慢することにした。やけくそになった理子がしこを踏んでいると、少し太り気味の筋肉もりもりの学生がやってきた。直子がボールをセットすると「いくで〜」と大きな声を張り上げて助走をつけて思いっきり蹴った。ボールはゴールを外したがライナーのボールはバックのフェンスに突き刺さった。

「ワオ～」理子もこのボールには目をむいた。巨漢の彼女は砲丸投げの選手だった。直子はすぐに駆け寄り明日も遊びに来てくれるように頼んだ。巨漢はニコッと笑うと「ええで」と言って仲間のところに戻った。理子はうれしくなってジャンプした。巨漢がたとえ同好会に入ってくれなくても自分よりパワフルなシュートをした彼女に会えたことを喜んだ。きっと、健太はこのことを言っていたに違いないと確信した。いつか仲間ができる、そんな気持ちが次第にわいてきた。

二人はとにかくサッカー遊びを続けることにした。一日に数人のときもあったがまったく誰一人現れないときもあった。しょげる理子を見ると直子はきっと仲間ができるよと励ました。両親にはサッカー部創設はうまく言っていると嘘を突き通した。6月にはいると二人は行き詰まりを感じ始めた。そんな時、九州スポーツ振興協会主催の海外研修旅行無料招待の応募が掲示板に貼られていた。協賛に中洲女学院高等学校が参入していた。招待人員男女各4名。場所はカンボジアのシェムリアップで、日程は8月5日から18日までの2週間。内、3日間はホームステイとあった。締め切りは6月10日と迫っていた。早速、理子は応募した。

カンボジア研修

6月20日に招待通知が来たが、これは両親に内緒にしていた。理子ははしゃいで喜んだが両親は反対した。研修先がカンボジアだからであった。韓国のカンボジアへのレジャー産業投資は盛んで世界的に注目を浴びているが、かつては戦場であり多くの地雷と不発弾が埋没しており、いまだその処理は遅々と進んでいないことを知っていた両親は断固として反対した。理子もそのことは社会の授業で学んでいた。

しかし、研修はハングル語、クメール語、クメール文化、カンボジアの政治経済学、スポーツ科学及びスポーツビジネス学と研修内容に明記してあったこと。さらに、研修施設は韓国のソンヤムが経営するスポーツジムであることなど決して危険な研修ではないことを両親に訴えた。両親が協会に問い合わせると研修センタージムは危険な地区から離れた場所にあることを知らされた。再三の理子の説得に両親も根負けして研修旅行を承諾した。

後日届いた研修内容の資料を見ると研修メンバーに釜本健太の名前があった。偶然とはいえ理子はうれしくて涙がこぼれた。すぐに、メールすると健太からも驚きのメールが返ってきた。さらに、この研修でしっかりスポーツ科学とスポーツビジネス学を勉強し、これに関する卒論を書きたいこと、将来ドイツのプロリーグでサッカーをやりたいことなどいくつかのプランを打ち明けた。メールを読んだ理子は、健太は大人であることに改めて感心した。

8月5日、福岡空港を飛び立ちバンコクを経由してシェムリアップ国際空港に到着した。空港から20人乗りのジム専用マイクロバスでシェムリアップ東部の研修センタージムに到着した。研修メンバーは二人一組で4組の編成となっていた。理子はバレーボール選手の荒木舞とのペアだった。到着後部屋割りされると早速2Fの研修室でミーティングが行われた。6日と7日はハングル語、クメール語とクメール文化の学習、8日から10日まではホームステイ、11日から13日まではスポーツ科学、スポーツビジネス学とカンボジア政治経済学、14日から16日まではアンコール遺跡、地雷博物館、アンコール動物園及び市内観光、17日は研修体験のディスカッションとレポート提出、18日に帰国と研修予定の説明があった。

二日間の語学研修を終えた研修生はAグループとBグループに編成された。各グループには日本語が話せるガイドが付き添い、二つの村でホームステイをすることになった。Aグループは渡辺理子（福岡県・サッカー）、荒木舞（宮崎県・バレーボール）、釜本健太（福岡県・サッカー）、鈴木進（沖縄県・野球）、Bグループは板野洋子（大分県・バスケットボール）、大島恵（長崎県・テニス）、小野純一（熊本県・水泳）、宮崎栄治（佐賀県・ボクシング）。ホームステイ先は国道6号線沿いにあるプリア・ネット・プリア近くにある農村の村長の家が指定された。

理子たちがホームステイするサバーイ村長の家は貧困家庭が多いカンボジアにあっては裕福であった。近年開発が進んでいるこの地域では土地成金が増えている。サバーイ村長もその一人であった。ホームステイの目的はカンボジア庶民の貧困を彼らの生活から実体験することであったが、悪化している治安状況を考慮してあえて裕福な村長の家庭が指定されていた。Bグループも同様であった。

8日はサバーイ村長一族との懇親会が催され「アプサラの踊り」が披露された。9日は村長の親類の家庭を訪問し伝統工芸といえる織物の実体験をした。ほとんどの村民は農業を専業としているが、農閑期の副業として女性たちによって織物が作られる。日本では考えられないほどの貧困であるが、子どもたちは無邪気で明るく、理子は写真を撮ってプレゼントした。

村長の家族には三人の娘と男の子がいた。理子は2個のサッカーボールを子どもたちにプレゼントした。9歳になる三女のスマートちゃんはとても利発で運動神経がよくサッカーボールがとても気に入った。村の子どもたちを集めて理子たちはサッカーを日が暮れるまで楽しんだ。子どもたちがボールを追いかける楽しそうな姿を見て、将来カンボジアにサッカーチームを作りサッカーを広めたいという夢を抱いた。

9日の夜から10日にかけて大雨が襲ってきた。眠れないほどの雨音で理子と舞は一晩中震えていた。朝方雨は止んだが理子は震えが止まらなかった。さらに、頭痛を感じ、熱を測ると39度の高熱であった。ガイドはすぐに救急車を手配したが、隣村までは来られるが大雨のためにこの村へは来られないことがわかった。大雨になるとこの村と隣村を結ぶ道が必ず水没するのである。町の救急車は隣村には約20分すれば到着するが隣村までは歩いて行かなければならなくなった。

隣村まで幅80センチメートル、距離500メートルほどの細い道があり、この道は昔から村人が往来している安全な道であった。だが、この道は地雷危険地区を横切っているため道の周辺に地雷がある可能性は残っていた。もし、デング熱であれば大変なことになる、一刻も早く隣村に連れて行くべきだと村長はガイドに話した。ガイドは研修生にそのことを話すと理子を背負って隣村まで連れて行くと健太は顔を真っ赤にして言った。

早速、村長と理子を背負った健太三人は隣村につながる細い道を急ぎ足で歩き始めた。健太は理子の無事を祈願しながら無我夢中で突き進んだ。村長が「アエ・ヌッフ」と叫んだ。大きな高床式の建物が健太の目に飛び込んできた。健太の心に弾みがついた。そのときである、数匹の犬の吠える声が鳴り響いた。犬嫌いの健太はびっくりしてとっさに右方向にジャンプした。そして、着地と同時に理子を落とすと後ずさりした。

「あ！」健太は我に帰り理子の元に駆けよろうとした。その瞬間、鼓膜を突き破るような爆発音がした。健太の目に飛び込んだ鮮血は理子を真っ赤に染めた。爆発音を聞きつけた村人たちが集まってきた。村長は地雷で足が吹っ飛んだと村の医者に伝え、医者を引っ張ってやってきた。健太は理子の右足首の上をしっかりと握り「あ～、あ～」と悲鳴を上げた。医者は足首の上を紐で縛ると村人に理子を運ばせた。

小さな勇気

救急車で町の病院に運ばれ応急処置を受けた理子はバンコクの病院に入院した。3週間後、一命をとりとめた理子は福岡赤十字病院に転院した。理子の足の傷は次第に治癒したが心の傷は深まる一方で起き上がる気力も失った。ついに両親とも話さなくなってしまった。半年後、退院したが部屋にこもって歩こうともしなかった。サッカー選手の夢を失った理子はいっそ死んでしまっていたらよかったと何度も思った。もう、自分の人生なんてどうでもいいと思った。

健太もずっと悩んでいた。もしあの時理子を落とさずいたならば地雷を踏むことはなかった、失われた足は二度と戻ってこない、このことを考えると涙が止まらなかった。また、サッカー選手としてオリンピックに出る夢も破壊してしまった。もはや理子に会わせる顔はないと思った。健太は大学を退学し理子の知らない町で働き、そのお金でサッカーができる世界一の義足を理子に作ってやる決意をした。

FC福岡でサッカーをやっている子供のころからの写真、サッカーの雑誌、サッカーのDVD、サッカーボールなどサッカーに関するすべてのものを理子は一人で処分した。また、家族においてサッカーの会話を一切しなくなった。健太からのメールもすべて拒否した。ほんの少し会話したのは母親とだけであった。家族も健太ももはやなすすべはなかった。理子はひそかに自殺の計画を立てていた。

今回は、置手紙は書かず、健太にもメールせず、一人で西海橋に行く決心をした。明日決行することにした。その夜、母親が部屋にやってきた。健太からの伝言を伝えるためだ。内容は次のようなことだった。明日、いつものようにFC福岡小学生チームと同好会チームの試合をするから見に来てほしい。理子と会えるのはこれが最後だ。理子は悩んだが結局行くことにした。理子も最後にしたかったからだ。

理子はキックオフ開始時間に遅れたが、母親に押されて車椅子でグラウンドに着いた。グラウンドではいつものメンバーがボールを追いかけていた。いつもは得点が取れない同好会であったが今日に限って3点も取っていた。20分ハーフの試合は同点でPK戦になった。PK戦も互角で小学生チームが一本外した。同好会が最後に決めれば初めての勝利となる。理子はぼんやり眺めていた。

同好会の5番目の選手が立ち上がったとき健太はストップをかけた。そして、すばやく理子のところに駆け寄ってきた。「理子、別れのボールを蹴ってくれ」健太はお願いした。理子はゆっくり頷いた。理子は義足をつけると恐る恐るゆっくりとグラウンドに入ってきた。ボールの前に立つと目の前にはゴールキーパーの健太が大きく手を広げて待ち構えていた。「よし、さあ、来い」と健太は気合を入れた。

理子は義足を大きく後ろに引くと健太に目がけてボールを運ぶように蹴った。ボールはゆっくりと転がり健太の手元まで転がった。健太は拾い上げるようにボールをしっかり抱きしめて「よし」とつぶやいた。そして、「大好きだ！」と大きな声で叫ぶとゴールに倒れた。その瞬間、大きな爆音が鳴り響いた。あの時の地雷の音にも負けない小さな勇気に対するみんなの拍手だった。

初めて試合に勝ったときの拍手がよみがえってきた。そして、ボールを追いかけている子供のころの自分の姿が頭の中を駆け巡った。健太がプレゼントしたスニーカーを履いた義足はひとりで歩き始めていた。しっかりボールを抱きしめ倒れた健太のところまで歩いていくと「この足で生きていくよ」と義足で健太を蹴った。そのとき、健太は死ぬまで理子の義足になることを決意した。

3ヵ月後、学校を辞めた理子と健太はカンボジアに旅立った。理子の左手薬指には健太手作りの婚約指輪が輝いていた。